

クリストファー・ホーランド 『老婆たち』(翻訳・解説)

Christopher Holland's *The Old Women*: A Translation with Commentary

小西 章典*

Akinori KONISHI

Summary

London's Grand Guignol made an imprint in the history of British Drama in 1920 at the Little Theatre. In total forty-three plays had been staged there for two years. Among them Christopher Holland's *The Old Women* is representative of the repertoire. Here is a Japanese translation of this play of fear and terror.

キーワード : 大戦間期イギリス演劇 ; グラン・ギニョル ; 恐怖演劇

Keywords : British Drama between the World Wars; Grand Guignol; Play of Fear and Terror

1921年6月29日初演

ルイーザ
ラ・ボニエス
ラ・ノーマンド
ラ・ボシュウ
マダム・ロビン
シスター
某シスター
医者
住み込みの外科医

第 1 幕

場面。水性白色塗料で塗られた小さな部屋。3つのベッドがあり、それぞれのそばには小さなテーブルがおかれている。上手と下手に扉。上手に窓。2番目のベッドと3番目のベッドのあいだに鑄鉄のストーヴ。聖母マリア像がかかげられた壁には棚。場面はノルマンディーのサン＝レジェール。

幕があがると、シスターが部屋の端にすわり、ロザリオを手にして祈りをとなえている。小休止。少し離れたところで鐘が鳴る。

上手からマダム・ロビン登場。

マダム・ロビン : シスター?

シスター (祈るのをやめて) : 少しお待ちになって。

マダム・ロビン : え、シスター、なんておっしゃったの。なにかしていらっしゃるってわかりませんでした。

* 教養部外国語教室

シスター（祈りを終えて、聖牌に口づけをし、十字をきったときに）： ええと、なんのご用？

マダム・ロビン： 先生に言われて、わたしと子どもすぐに回診にむかうつもりだとお知らせにまいりました。

シスター： 承知しました。ありがとうございます。患者さんたちはもう大食堂を出ましたか？

マダム・ロビン： まだです、シスター。わたしは今晚それほどお腹がすいていませんでした。誰よりも先に出てきました。

シスター（眼鏡をかけて）： かぎ針編み細工をもってきてください。そこ、棚のうえ。

マダム・ロビン： わかりました、シスター。ベッドをととのえて、常夜灯を準備いたします。

シスター： すべてきちんとするように心して。散らかしっぱなしになっているものがないように。

マダム・ロビン（ベッドをととのえ、ベッドカバーをおりかえて）： おっしゃるまでもありません。わたしほど几帳面な人はいません。小さな自宅をかまえていたとき、すべての時間を費やして家中をきちんとしたものです。楽しかった。ずいぶん昔のこと。本当ですよ。

シスター（手を動かしながら）： ここに、精神病院にはどれくらいいるの？

マダム・ロビン： 40年。（思い返ししながら）40年。ドクター・デルベックの時代でした。彼のことを覚えておられないでしょ……もうお亡くなりです。住み込みの外科医は、ベルニエ先生と呼ばれていました……彼もお亡くなりです。それから、シスターがいらした。シスター・フェリシティと呼ばれていた——彼女もお亡くなりです——みんな死んじゃった。あなたがそれを思い出させてくれることになるなんて、変ですね。（棚に行き、戸棚から常夜灯をとり出す。）

シスター： 治療が終わったのに、どうしてここに留まったの？ 身寄りがいなかったの？

マダム・ロビン： そうなんです、シスター。でも、ご存知でしょ、このように長く精神病院にいつづけると、外の世界に馴染むことなんてできないってこと。あなたのご親戚だってそんなもの言いたげな奇妙な眼でいつも眺めてくるでしょ。また気がふれるんじゃないかって思っているの。精神病院にいと知ったら、まるで疫病もちみたいに、あなたのことを避けるわ。だから、たったひとつのことだけを求めて、サン＝レジェルに戻る方が幸せなの。ここで一生を終えるってことだけを求めてね。（上手舞台裏で音）

シスター： あれはなんでしょう？

マダム・ロビン： たいしたことではありません。マリーがまたやっているだけでしょう。ああ、わたしはこの子になりたいものですわ。

シスター： だれのことを言っているの？

マダム・ロビン（窓のいちばん近くにあるベッドをさして）： あら、ルイズさんです、ここでお休みの。わたしよりも幸運の持ち主。若い。いままでどおり幸せでいられる。本当なんですか、シスター、彼女がすっかり完治したってこと、すぐに家に帰ることになるってこと？

シスター（そっけなく）： そう言われています。

マダム・ロビン： 幸運なお嬢さん。シスター、彼女はいいところの出なんです。わたし、ご家族のことをとてもよく存じ上げています。わたし、同郷の出なんです。

シスター（立ち上がって棚にかぎ針編み細工をおく。軽蔑して）： ふんっ！ その人たちは自分の子どもをずっと奇妙なやり方で育ててきた。そうでしょう……

マダム・ロビン： まあ！

シスター： 彼女はものをまったく知らない。

マダム・ロビン： 文字は読めます。

シスター： そう、読めます。でも、お祈りの言葉はひとつも知らない。彼女は神様のことすら信じていないのじゃないかしらってときどき思います。

マダム・ロビン： だからって彼女を責めてはいけません、シスター。そういうふうにご両親が育てたのなら、彼女が悪いのではないもの。まったくもって、自然の成り行き。

シスター： 神様への信仰心を持ち合わせていないってことが？ それを自然の成り行きだなんておっしゃるの！

マダム・ロビン： ええ、シスター。あなたにはまったくあずかり知らないことなのです——それについては、だれかほかの方が教えてくれますよ。

シスター： 彼女はとても頑固なお嬢さんです。悪い傾向の印がすでにでてきている。20回説き伏せて彼女を教会に行かせようとしてみました。でも、これまでに行こうとしてみたことがあって？ ありませんよ、彼女は。それで、ここを出たとしてどのような振る舞いを彼女に期待できるというの？ 信仰をもたない人というのは獣と同じです。（鐘が鳴る。）

マダム・ロビン（窓辺に向かう）： ああ！ みんなが休憩室から出ていこうとしている。それでは、わたしもまいります。あの2人にここで会いたくはな

いのです。

シスター： 誰のことを言っているの？

マダム・ロビン（2つのベッドを指して）： ここで寝ている醜い老婆たち。あの年老いた女ども。ラ・ボシュウとラ・ノーマンド、老いさらばえた邪悪な悪魔ども。

シスター： これこれ、マダム・ロビン。

マダム・ロビン： ごめんなさい、シスター——思わず口からこぼれ出ました。でも、どうも彼女たちのことを考えると、わたし、できません……

シスター： 彼女たちに気に食わないところがありますか——2人の憐れな精神を病んだ老婆たちに？

マダム・ロビン： 2人のとても危険な老婆たちです。悪魔そのものと言ってもいいくらい邪悪です。

シスター： わたしには決してそうは見えません。これまでとても従順で穏やかだとずっと感じてきました。

マダム・ロビン： そう、ご一緒のときは、そのようにして騙していたのです。狂った人は、ほかの人とまったく見分けがつかせませんもの。いずれ、なかには邪悪な獣がまじっているとわかるでしょうし、偽善者がまじっているとわかるでしょうが、その人たちは、どのようにしたらあなたを騙すことができるのか思いめぐらし、たくらみを働かせているのです。彼女たちを信用してはだめ。あの2人の老いさらばえた魔女たちの出身地はどこですか？

シスター： わかりません。

マダム・ロビン： 彼女たちが言ったことは、本当ですか？ 娘たちを亡くした悲しみから気がふれてしまった、ってこと？

シスター： そうです。

マダム・ロビン： だから、いまでは女の子を見ると、彼女たちは必ずその子に嫉妬を抱いてしまうし、まるで災難の原因でもあるかのように、必ずやその子を痛めつけてやりたいと思ってしまいます。

シスター： 彼女たちが痛めつけたいのは誰だと思えますか？

マダム・ロビン： ここにいるあのお嬢さんです。

シスター： ルイーゼさん？

マダム・ロビン： そう。この寄宿舎で仕事をするようになってから、これまでにたくさんのことに気がつきました。あの扉の反対側の隣室で休んでいる隻眼の老婆をご存知でしょう。

シスター； ああ、はい、ラ・ボニエス。

マダム・ロビン： なにがあっても、あの女をよきカトリック信者などとは呼べません。子どもたちを殺

して死刑宣告を下されたあの女。人食い女鬼、みんな彼女をそう呼んでいました。

シスター： 彼女は正気を失っていたの——狂っていたの。お医者さんたちの誰も彼もがそう言ったの。だから、放免になったの。

マダム・ロビン： うん、まったくそのとおり、彼女は他の患者たちと同室にさせていいような類の人間ではありません。彼女のような人専用の精神病院で、どこか別室に閉じ込めておくべきなのです。危険なのです。

シスター： 彼女は6年間も麻痺がつづいています。6年間ベッドから出たことが一度もないのです。恐れるところなどなにもありません……

マダム・ロビン： わたしには、そんなのはわかりません。

シスター： おびえてばかりが過ぎます。ここでは、どれも危険を冒すことなんてできないのです。精神病院には十分すぎるくらいに眼が行き届いています。女性用宿舎だけでも10人のシスターがいます。

マダム・ロビン： 日中はそうです。でも、夜はみんな放っておかれています。

シスター： それが規則ですから。

マダム・ロビン： わかっています。日中は朝から晩までへとへとになって、夜中は眠る。

シスター： 夜は祈るのです。あなたたちのために祈りをささげるのです。

マダム・ロビン： それはまったく結構なこと、でも、夜に見回りをしている精神病院もあります。ここではなさらぬ。

シスター： これまでに一大事が起こったことはないから。

マダム・ロビン： まだ起こっていない、ということかもしれません……でも……（寄宿舎に入ってくる入院患者たちの音が上手ならびに下手にする）入院患者たちがベッドに向かっているのだわ。

シスター： もう少しここにおいて、患者さんたちのお世話をするんでしょ、マダム・ロビン？ わたしはシスター・プラシードに今晚の典礼の件を伝えに行かなければなりません。

マダム・ロビン： どういった典礼なのですか、シスター？

シスター： シスター・シュルピスが今朝帰天されました。今晚は信者全員でチャペルに安置されているご遺体の寝ずの番をしなければなりません。（上手へと退場。）

マダム・ロビン： おかわいそうに、シスター・シュル

ピス。本当に良い方だった、彼女。(下手から狡猾で悪魔のような顔をした皺だらけの2人の老婆ラ・ボシュウとラ・ノーマンドが登場。) ほら、来た。わっ! 大嫌い。(ラ・ノーマンドが先に登場し、あたりを見回してから振り向いて「ちょっと」と述べる。ラ・ボシュウ登場。彼女たちは低い声で話す。)

ラ・ノーマンド: あの娘、まだそこにいないの?

ラ・ボシュウ: 中庭を散歩しているにちがいないわ。

ラ・ノーマンド: そうね。ラ・ボニエスに会いに行きましょう。

ラ・ボシュウ: あの方もわたしたちが来るものだと思っているでしょ。

ラ・ノーマンド: わたしたちはあの方のことを待っているだけよ。

ラ・ボシュウ: そしてあの方が合図をしたら……

ラ・ノーマンド: 死の合図!

マダム・ロビン: そこでなにをブツブツ言っているの、2人して? (ラ・ノーマンドが笑う。) なにがおかしいの?

ラ・ノーマンド: そして彼は「おまえはシャンブールシーの小僧だね」と述べた。

ラ・ボシュウ: 彼は墓地の管理人にもチップをあげたんだが、当の管理人は「9時から8時までは閉鎖されています。誓って……それでは、そうあれかし」と述べた。

ラ・ノーマンド: アーメン(2人して十字をきる。)

マダム・ロビン(思わず肩をすくめて笑う): 老いさらばえたやつらだ。彼らを見るとときに笑いをこらえることができないの。

ラ・ノーマンド(部屋を横切ってルイズのベッドの前で立ち止まる): ほら!

ラ・ボシュウ: 頭、そこ……

ラ・ノーマンド: 足、そこ……

ラ・ボシュウ(笑いながら): さあ! さあ!

ラ・ノーマンド(笑いながら): さあ! さあ!

マダム・ロビン: ほら、やることはやってしまったも同然なんでしょ? 就寝しなさい。その子をどうしてひとりにしてあげられないの? 彼女があなたたちになにをしたっていうの?

ラ・ノーマンド: はっきりと口にしてはいけないこともあるのよね。

ラ・ボシュウ: 口にしてしまったら、不運がもたらされるのよね。

マダム・ロビン: ああそうね。そのことなら一から十まで承知しているわ。おや、ほらここ、こんないたずらで彼女を怖がらせて苦しめつづけるのなら……

…ああ、先日もあなたたちが彼女を転ばせようとしているのを見たわ……ええと、先生に言いつけてやるわ、そうすれば、あなたたちは2人とも拘束衣を着させられることになるわね。先日、先生があなたにしたように。(ラ・ノーマンドに対して)

ラ・ノーマンド(おびえて): ちくしょう、だまっていやがれってんだよ、え?(上手に退場。)

ラ・ボシュウ(彼女を追って): いやな野郎だね、汚らしいヒキガエルめ。(上手に退場)

マダム・ロビン: びっくりしたでしょ。あいつら、どこ行っちゃったの?(開け放たれた扉からのぞく。)

あそこにいるわ、ラ・ボニエスのベッドの脇。よくもまあ、あの3人にゲラゲラ笑うものなんてあるのかね! こちらを見て、怖い顔をしている……わたしを怖がらせておいて、それからやってしまつつもりなのね。あいつらと一緒に部屋で休むのはごめんだわ。(ルイズ登場。かわいらしく、内気で、繊細な、金髪の16歳の若い女の子。彼女は入り口からマダム・ロビンをながめる。)

ルイズ: ああ、マダム・ロビン。お目にかかれてとてもうれしいわ。では、まだここにいらっしゃるのですね?

マダム・ロビン: シスターを待っているの、すぐに戻ってくるわ。ええと、今日は幸せそうね、あなた!

ルイズ: おそらくそうだとは思うのですが。

マダム・ロビン: それならあなたがここを発つことになるというのは本当だったのね? もうすぐに出かけることになるというのは?

ルイズ: そうだと思います。すっかり治りましたし。

マダム・ロビン: うれしいでしょ、え?

ルイズ: もちろん。会えないと寂しくなるなあと感じる人は、ここにはひとりしかいませんし、それはあなたのことなんですけど。あなたはとても親切にしてくれました。

マダム・ロビン: わたしが? ええと、それぐらいのこと、だれでもできますよ。それに、あなたこそわたしにとっても親切にしてくれたんですよ。贈り物をしてもらおうと、いつでも、わたしにもお恵みくださいました。

ルイズ: ここにはこんなにも多くの悲しみがあつて、わたしたちは幸せとあらばどんなものでもできる限り互いに与えあおうとしなければならぬ。(あたりを見回す。)

マダム・ロビン: なに?

ルイズ: やつらはまだ来ていないわよね?

マダム・ロビン: ええ。そのなかにも、ラ・ボニエスといっしょよ。

ルイズ (おびえて)： ああ！
マダム・ロビン： どうしたの？
ルイズ： なにも。
マダム・ロビン： なにか悪事をたくらんでいるんだわ。
やつらはいつも一緒にいる。
ルイズ： そうね。聞いて、マダム・ロビン。あなた
になら話せる。あの3人の女がわたしを怖がらせ
るの。そばを通るといつもわたしをじっと見てく
るの、じつとよ。とくにラ・ボニエス。やつらのせ
いで、わたし体中が冷たくなってしまうの。寄宿舎
のそばを通ろうなんて勇氣、もうほとんどありま
せん。やつら、なんだっていうの？ わたしがなに
をしたっていうの？
マダム・ロビン： なにも——やつら、狂っているの—
—無視しておきなさい。
ルイズ： どうしようもないの、マダム・ロビン。怖
がらせてくるんだから。
マダム・ロビン： そんなにまでひどく動揺させられる
のならば、シスターにお話ししたらいいじゃない。
ルイズ： 聞く耳をもとうとしてくれないの。お互い
うまくやっていけないの。
マダム・ロビン： 信仰について、ですね。よし、そう
だ。それなら、先生と面会したらいいじゃない。彼
には話せるでしょ。彼はとても親切よ。
ルイズ： そうですけど、勇氣がないの。ねえ……
マダム・ロビン： しっ！ シスターだわ(2人とも
黙る。)
シスター (上手から登場しながら——ルイズを見
る)： あ！ あなたなの。あなたがすぐにここを
発つかもしないとドクターがおっしゃっている、
そう耳にしました。
ルイズ： そうです、シスター。そう思います。
シスター： 発つまえに自分が万事正常であるという
ことを、たしかめなければなりません。
ルイズ： そうですね、シスター。
マダム・ロビン： お手伝いするつもりです。
ルイズ： 本当にありがとうございます。
シスター (ルイズに)： 昨日はチャペルで会いませ
んでしたね。日曜日でしたよ。どうしたのですか？
(沈黙) 理由はなかったのね。いましがた礼拝堂付
き司祭にお会いしたら、「シスター、精神病院全体
で告解をしたことがない入院患者はたったひとり
しかいない——そして、その方はあなたの保護下
にあります」とおっしゃっていました。わたしがその
ような叱責をうけて心地よく思っているのです
か？
ルイズ： いいえ、シスター。

シスター： あなたはずっと重病だった。二度も死線を
さまよった。
ルイズ： わかっています。
シスター： このつぎはおそらく逃れられないでしょ
う。それで、死が訪れて扉をたたき、魂を連れ去ろ
うとすると、そのときになって告解をしたいと思
うのですが、おそらくは時すでに遅しです。
ルイズ： よして。よして。
マダム・ロビン (ルイズへの傍白)： さあ、さあ！
なんでもないわ！ シスターたるものそういった
ことを言う必要があるの、それが彼女の人生の重
要部分なの。おやすみなさいな、あなた。そら、そ
ら、もうほんの少しの時間しかないわ——すぐに
夜が明けてしまう。おやすみなさい、シスター。
シスター： おやすみなさい。(遠くで鐘が鳴る。)
マダム・ロビン (下手へと退場しながら)： 聞いて、
帰天されたシスター・シュルピスのために鐘が鳴
っている。
ルイズ (鐘を聞きながら身震いして)： ああ、陰鬱
な哀悼の鐘！ (住み込みの外科医と連れ立って
医者が上手から登場。)
医者： どうしてあの鐘は鳴っているの？ 誰か亡く
なったの？
シスター： そうです、ドクター。シスター・シュルピ
スが本日午前11時ちょうど、盛式ミサの最中に
帰天されました。会衆の皆が彼女のベッドのまわ
りに集っていました。
医者 (アイロニーをこめて)： それで、そのあいだ入
院患者たちはどうなったの？ 誰が面倒をみた
の？
シスター： それほど長い時間持ち場を離れていたの
ではありません。
医者： それが当然だと思いますよ。ここで報告してお
くべきことはありますか？
シスター： いいえ、ドクター、万事いつもどおりでま
ったく静かなものです。
医者： 平熱、暴れたり、発作を起こしたりすること
もない？
シスター： はい、ドクター、まったくありません。
医者： よろしい。(住み込みの外科医に) 行こう、ル
ブロン。(退場して行こうとする。)
ルイズ： シスター！
シスター： なに？
ルイズ： 先生にお話ししたいのですが。
シスター： ドクターにそのお時間はごさいません。
医者 (戻ってきて)： いやいや、ありますよ、シスタ
ー。わたしになにかお願いしたいんですよね？

ルイーザ： そのとおりです、先生。どうかお願いします。

住み込みの外科医（医者に傍白）： かわいい子ですね。

医者： ええ。そうですね。

住み込みの外科医： オフィーリアを思い出します。金色の髪の毛をし、哀れをさそう面持ちですね、シスター。

シスター（そっけなく）： わかりません。

医者： ええと、さあ早く、ねえ、なにか用？ シスター、よければ椅子を2つもってきてくれませんか？ ここを発つことについて話したいのですよ？ きっとそのことだと思うんだ。

ルイーザ： はい、先生。

医者（ほほえみながら）： なんて恩知らずなんだ！
それで、どうして出ていきたいの？

ルイーザ： 完治したから。あなたが治してくれたの。

医者： そう——そう思います。たしかに以前よりもずいぶん良さそうだ。（住み込みの外科医に）彼女の瞳は以前に比べてはるかに澄んで輝いているよね。

住み込みの外科医： 顔全体のようにすが、以前に比べると、警戒心にみちて聡明さにあふれて……

医者： ほら！ わたしが彼女のことをクレプレン型¹⁾の鬱病患者と診断したのに対して、君は……

住み込みの外科医： そうですね。わたしはむしろ早発痴呆²⁾の一症例だと見なしました。

医者： そうだったとしたら、君がいま目にしている状態に彼女は決してたどり着かなかったでしょうな。

住み込みの外科医： 回復した症例もいくつかありますよ。

医者： これほど完璧にはないでしょう。（ドアが開いて女性の顔があらわれ、シスターに小さい声で話す。）

声： シスター。みんなが彼女を棺のなかに入れていきます。

シスター： よろしい。行きますよ。（シスターは上手に退場。遠くで鐘が鳴りつづけている。）

医者（ルイーザに）： それなら、もうあの悪夢を見なくなったのだね、もうあの幻覚を。

ルイーザ： わたし——

医者： もう覚えてすらいないんですよ。ええ、それだけよくなったということです。

ルイーザ： そうです、先生、たしかにもうすっかりよくなっている、そう感じます。ともかくまるで正気を取りもどしたかのように感じるのです。だから、家に帰りたいのです。

医者： わかります……でも、慎重に事を運ばなければなりません。（住み込みの外科医に）彼女の出身地はどこ？

住み込みの外科医： フェカンドと思います。

ルイーザ： そうです、親族みんながそちらで暮らしています。

医者： この問題が起こったときは自宅にいたの？

ルイーザ： いいえ、働いていました。10歳のときから始終働いてきました。ある職に就いていたのです。

医者： それで、あなたの頭が正常でなくなっていたことに雇い主たちは気づいていたのかな？

ルイーザ： はい。

医者： 今後またあなたを連れ戻そうとすると思いませんか？

ルイーザ： わかりません。

医者： そちらにいる人は残らずあなたがサン＝レジュールにいたということを知るでしょう。別の場所を見つけるのは難しくなるでしょうね。いいですか、精神病院にいたことがある人にとって、人生とはかなりつらいものなのです。

ルイーザ： はい、わかっています。つらいです。それでも、もう完治しているので、永遠にわたしを精神病院に入れておくことなどできません。そんなことになるとしたら、人生なんてものはまったく台無しになる。

医者： たしかに。でも、ここですこし待機しててください。

ルイーザ： 待機？

医者： そう。もう少しのあいだそのままです。ここではそれほど心沸き立ちはないかもしれない。でも、かえってそのほうがよいのです。

ルイーザ： ああ！ だめです……

医者： そうだ、そうだ。そうすれば、あなたにしてあげられることを考えてみるための時間が手にはいる。

ルイーザ： だめです。だってわたしは出ていかなければ

¹⁾ Kraepelin というスペル——これはド・ロルドとビネのオリジナル原稿と同一——は、ときに現代精神医学の父と目される人物であるエミール・クレペリン（Emil Kraepelin）（1856-1926）を明白に想起させる。彼は統合失調症や躁鬱病を発見し、アルツハイ

マー病の共同発見者でもあった。

²⁾ これはのちに統合失調症という語にかわるものについてのクレペリンの定義である。

ばならないのですよ。

医者： それで、ここを出てどこに行くつもり？ いったいなにか考えがあるの？

ルイーザ： パリに行きます。

医者： パリに？

ルイーザ： 大都会。そこでとにかく仕事を見つけます。

医者： そこに知りあいがいるの？

ルイーザ： いいえ。でも、そんなの大したことはありません。どうにかうまくやっていくつもりです。

医者： わかってないんじゃないかと思うな。パリ。パリね。あなたみたいなかわいい女の子ひとり。あんなところにいたら身の破滅だ。それでたくさんの試練と失望を味わってもなお、くりかえしすぐに困難が眼のまえにあらわれてくる。ありえない。

ルイーザ： 先生！

医者： だめだ、だめだ。問題外だ。

ルイーザ： それなら、わたしに出て行ってほしくないのですか？

医者： いますぐにはね。とても興味深い症例だからね。あなたのことを注視しておきたいのだ。(住み込みの外科医に) ねえ、ついさっき君に言われたことで、考え込んでしまったよ。(ルイーザに) それで、あなたが行くのにふさわしい場所が見つけれられるまで——

ルイーザ： いつまでですか？

医者： いつまで？ ああ、わからないな。たとえば2週間、おそらくは1週間かな。

ルイーザ (かたくなに)： いたくありません。

医者： どうして？

ルイーザ： さらに1週間もここに！ だめ、そんなつもりはない、ない！

医者： おい！ おい！

ルイーザ： 言わせていただきますが、もうこれ以上ここにいたくはありません。出て行きたいんです。(声をひそめて) もうこれ以上この部屋で眠りたくないのです。

医者 (彼女の口調に圧倒されて)： どういうこと？ おいおい、これは別の問題だぞ。この件にこれまでにいちどたりとも触れたことがなかったよね。(ルイーザがすばやく部屋中をさっと見回しているのを目撃して) どうしてそこを見回しているの？

ルイーザ： シスターに聞かれたいくないのです。

医者： 彼女のことで悩みをかかえてきたの？ (ルイーザはうなだれて、なにも答えない。) 驚くにはあたらないな。彼女は狂信的だ。どんなことで悩まされてきたの？ ミサに行ったことがないという理由ではなかった？

ルイーザ： そうです。でも、それが問題ではないのです。

医者： ええと、それでは、いったいなにか……？ もちろん教えてくれてもかまわないだよね……いま。われわれのあいだだけということで……まさしく重大なことがここで起こったの？

ルイーザ： はい。この部屋で。

医者： いつ？

ルイーザ： 夜に。みんなが就寝してしまうと。

医者： みんなって誰のことを言っているの？ ほかに患者さんたちがいるの？

ルイーザ： はい、でもシスターたちはみんな就寝してしまいます。そうすると……

医者： そうすると……さあ、そんなふうに震えていてはいけませんよ。(父親のように彼女の手をとる。) おしえて……。

ルイーザ： ああ、どう言ったらいいのかわかりません。そのことを考えるだけで、頭がすっかりおかしくなってしまうんです。

医者： そうだ、そうだ。いっしょに初めから終わりまでそのことを考えてみよう。さあ、落ち着いて……

ルイーザ： ええと、シスターが就寝すると、灯りがすべて消され、寄宿舍ではあらゆるものが変化してしまうようです。

医者： おや、どんな変化だい？

ルイーザ： わたしの理解が及ばないようなことなら、なんでも起こるんです。まず——ほらあのドア……

医者： ええ？

ルイーザ： 出ていくときにシスターが閉めるのです。昨晚の真夜中、そのドアが開くのを見ました、はじめはほんの少し、それからもっと開き、さらにもっと——音もたてずに、そして、見ると——というもの、わたしはいつもそのドアを注視してるのです——ひとり思うのです——さあ、あのドアが開く。さあ、あれがはじまることになる……

医者： 誰かがドアを開けるのを見たの？

ルイーザ： ひとりでに開き、それから、あたかもそれが合図であったかのように……そこで寝ている2人の老婆——ご存知ですか？

医者： はい——つづけて。

ルイーザ： 彼女たちが起きあがった。

医者： え？ 起きあがった？

ルイーザ： はい。彼女たちを制止する者はひとりもいませんでした。

医者： ちょっと待って。2人の老婆のうちのひとりラ・ノーマンドには昨晚拘束衣を着せたよ。

ルイズ： 知っていますが、もうひとりの老婆が自由にしてやったのです。

医者： でも鍵がないとできないよ。

ルイズ： 彼女は鍵をもっています。ほしいものならなんでも手にいれているんです——

医者： ほしいもの……

ルイズ： どうしてお2人ともわたしをそんなふうに見るのですか？

医者（住み込みの外科医に）： まだ興奮過剰を患っている思うんだが。

住み込みの外科医： そのようですね。

ルイズ： ああ神様！ わたしが嘘をついているとお思いですか、それとも、わたしがまだ狂っているとも？

医者： ちがう、ちがうよ、ねえ……それなら、彼女たちは起き上がってなにをしたの？

ルイズ： 黙ってわたしのベッドまでやってきて、屈みこんでわたしをじっと見ていました、まるでなにか危害でもくわえてやるつもりだといわんばかりに。

医者： なにか危害を？

ルイズ： でも、その勇気がなかった。彼女たちはぐるっと見回して出入口のその先に視線をむけ、首を横にふって「だめ、だめ」と言ったのです、まるでなにかを恐れているかのように。だれかに話しかけているみたいでした。だから、そこには誰かがいたのです。

医者： 誰？

ルイズ： ラ・ボニエス。彼女たちに合図を送っていたのです。

医者： あなたはそう思うんだね……

ルイズ： わたしにはわかっているんです、片眼をおおう黒い目隠しで、それが彼女だってことが。彼女が合図を送っていたのです。

医者： でもありえないよ。

ルイズ： 先生、彼女を見たんです。

医者： よく聞いて、まったくありえないんだ。彼女以外の2人の女は見たかもしれないね、歩けるから。でも、あなたがラ・ボニエスとよぶ人物は両足とも麻痺していて完全に寝たきりなんだ。起き上がることも、立ち上がることもできないよ。

ルイズ： 断言します、彼女を見たんです、先生。そこ、出入口のところに立っていました。

医者： わかるよね、きみ、まだ完治していないんだよ。

ルイズ： 治ってます。自分でわかっています。

医者： ちがうと思うんだよ、きみが主張することはまったくありえないから。

ルイズ： 先生、どうしたら納得してもらえるのかわからないけれど、彼女を見たんです。夢ではありませんでした。すっかり眼が覚めた状態で、彼女がほかの女たちに合図を送っていて、でもその女たちは恐れをなして求められたことをどうしてもしようとしなかった、そんな姿を目撃したんです。断言します、わたしは彼女を見ました。

住み込みの外科医： この子はこれまでもこのような幻覚を見たことありました。

医者： まさにそうだと思うよ。

住み込みの外科医： まったくありえることですよ、このような妄想は……

医者： これから起こる発作に先立つ症状だね。かわいそうに！

ルイズ： ちがいます、そうじゃありません、先生。

（住み込みの外科医に）ちがいます。断言します、一部始終を見たんです。

医者： そうだね、そうだね、もちろんだとも。きみは見た。見たと思っているんだね、あたかも……（住み込みの外科医に）間違いない。

住み込みの外科医： わたしもそう思います。

医者： またあの幻覚だ。

ルイズ： いいえ、いいえ、ちがいます、先生。もう狂ってはいません、先生。もう完全に健全だと見なしてもらわなければなりません。誓って、わたしは健全です。

医者： さあ、さあ。こんなふうになんか心を悩ませてはいけませんよ。

ルイズ： わかってます、興奮してはいっても、本当に狂っているわけではありません。馬鹿げた考えを口にしているのではないのです。（住み込みの外科医に）それはそうですよね、先生、馬鹿げた考えを口にしているのではないのです。お願いです、信じてください。

医者（彼女を落ちつかせようとして）： はい、はい。信じますよ。でもね、さらに2、3日間は保護観察しなければならぬと思うんだ。

ルイズ： 2、3日も！ でも、あれがまたはじまったら……

医者： わたしに知らせてくれなければなりません。

ルイズ： でも、わたしをここに置き去りにするつもりはないんですよ！ すぐによそにやることができないのならば、すくなくとも別の部屋にかえてください。

医者： ちょうどいまは満床だと思うのだが。

ルイズ： ああ、かえて。

医者： よろしい、忘れずに明日部屋をかえてあげよう。

ルイズ： でも、今日の夜は！ それぐらい怖いのです！ それぐらい怖いよ！

住み込みの外科医： なんてありさまだ！

医者： 今日の夜は、シスターをつきつきりていさせよう。

ルイズ： 彼女はずっとはいてくれません。

医者： はじめからおわりまで事細かに指示をあたえておくよ。

ルイズ： 彼女は出て行きます。

医者： そうはしないようにするよ。

ルイズ： あなた方が出ていったら、すぐにでもそうします——彼女は出て行きます。

医者： まあ、もういいよ。こんなふうに言いづけるのなら、われわれとしては完治していないと認識することになるし、そのような場合には、長いあいだ、まだここにとどめおかなければならないことにもなる。

ルイズ： ああ神様！（上手からシスター登場。）

医者（呼び止めて）： シスター！

シスター： ドクター！

医者： あまりにも聞き分けがないものだからここでこの子を叱っていたんだ。まだとても精神的に不安定なようで、わたしにはまったく根拠がないと思われる恐怖で心がいっぱいのようなのだ。それでも、恐怖心というのは彼女にはよくないから、無用な苦しみなどなしで済ませたい。今晚は寝ないで看病してもらうことになる。

シスター： でも、ドクター……

医者： ぜひしてもらわなくては。あなたがそばにいてくれることで、このような悪夢は回避されるだろう。

シスター： 悪夢など、どうと言うことありません。

医者： あなたのお世話を要するには十分すぎるくらいだ。

シスター： 不安定が度を越えた場合には、クロラールをスプーン2杯分飲ませます。

医者： だめだ。あなたが彼女についてあげの方がよい。

シスター： 今日の夜はかなり難しいでしょう。

医者： どうして？

シスター： 参列しなければならぬ典礼があるのです。

医者： どういった典礼ですか？

シスター： シスター・シュルピスのための典礼です。

医者： あ、そうか。そうだね。

シスター： ご遺体のそばで夜通し寝ずの番をして、帰天された方のために祈祷を唱えることとなります。

修道女会の全員が参列します。

医者： あなたの代わりの参列者を見つけなければならない。

シスター： それは不可能です。

医者： 少しばかりのご好意を示していただければ、まったく可能ですよ。

シスター： 女子修道院長は、わたしたちの何人たりとも聖所の礼拝を疎かにするのをお許しになりません。

医者： 人間性の要求は聖所の礼拝よりも重要であると明言しておかなければならないな。

シスター： わかりません……。それは見解の相違です。

医者： あなたの職務はここにとどまることだと述べてもなお、まだ躊躇っているのにはあきれたよ。

シスター： わたしの本分は女子修道院長に従うことです。

医者： 死者の寝ずの番をすることは、まったくもってたいへん結構だ。でも、もちろん生者への配慮がそれよりも優先されるべきだ。

シスター： わたしの本分とは、女子修道院長に従うことなのです。

医者： あなたの職務は、なにをおいてもわたしに従うことだ。精神病院の病棟では、女子修道院長ではなくて医者が命令を出すのだ。わかりますか？

シスター： はい、ドクター。

医者： よしよし。今日の夜、朝までの一晩はこの部屋ですごすように命じます。従ってくれますか、くれませんか？

シスター： 使用されている身にすぎません。職務とは従うことです。（小声で2、3つぶやく。）

医者： なにか言いました？

シスター： なにもございません、ドクター。申し上げることなどございません。

医者（厳格に）： よろしい。（ルイズに優しく）それみたことか、これで安心してくれるといいんだけど？（ルイズは答えない。）ねえ、おやすみなさい——おやすみ。（住み込みの外科医に）ああ、このシスターたち、シスターたち。とても立派な人たちだ、寡黙で真面目で献身的で。でも、面と向かって宗教の問題となると、ほとんど手に負えない。権威に対する組織化された反乱のようなものだ。

住み込みの外科医： なぜこの人を首にしないのですか？

医者： 誰であっても大差はないよ。（シスターをしたがえて、2人とも下手に退場。）

ルイズ（ひとりでベッドに腰かけて）： あの人たちはわたしが言うことをどうしても信じてくれない。

(叫び声をあげて) ああ神様! ああ神様! (ラ・ノーマンドとラ・ボシュウが上手から登場。夜のとばりがおきて、彼女たちの姿はかろうじて見えるくらい。静かに歩みをすすめてルイズに近づく。彼女は、物音に振り向き、おびえて、叫び声をあげる。)

ルイズ: ああ!

ラ・ノーマンド: 怖がらないで、いい子ね。

ラ・ボシュウ: 怪我をしたわけではないのだから、叫び声をあげてはだめ。

ラ・ノーマンド: 少し待って。

ラ・ボシュウ: ほんの少しよ。

ラ・ノーマンド: 夜は長いわ。

ラ・ボシュウ: ああ、夜はすてき、とてもすてき。

ルイズ: どうしてそんな眼で見るの?

ラ・ノーマンド: いまは彼女のことを見てはいけないわ。

ラ・ボシュウ: あなたはとてもかわいいわ。

ラ・ノーマンド: とくにその両方の瞳が。

ラ・ボシュウ: あなたのものではないのよ、いいこと。

ラ・ノーマンド: わかってます、わかってます。

ラ・ボシュウ: あの老婆はこうおっしゃいましたね。彼女は体内にフクロウを飼っている。

ラ・ノーマンド: そして、いつの日にか飛び去っていく。

ラ・ボシュウ (飛ぶしぐさをして): ポン! ポン!

ルイズ: 出て行って。近づかないで。(大声で呼んで) シスター!

ラ・ノーマンド: フクロウは二度とつかまらない。(2人は笑い、ふたたび彼女に近づく。)

シスター (下手ドアのところにふたたび登場。2人の老婆は静かに自分たちのベッドに引っ込む): どうしたの? 誰か呼んだ? またあなたなの?

ルイズ (依然としてかなりおびえて): そうです、シスター。

シスター: しょっちゅう不平ばかりいっている人は苦手です。それで、なんですか?

ルイズ (2人の女を指さして): あの人たちがそこにいます。

シスター: もちろんそこにいますよ、だって、あなたと同じ部屋で寝ているんですから。さあ、あなた方お3人さんとも、早くベッドのなかに入って。(マッチをすって常夜灯を点ける。部屋中をちらっと見まわす。隣の部屋で騒々しい声がする。) さあ、さあ、そこに入って。(常夜灯をとって、下手ドアを開け、部屋のなかを覗きこむ。) そこ静かに。もう大声はださない。就寝の時間です。聞こえます

か? (徐々に大声はおさまり、それから底知れない沈黙がある。ドアを閉めて鍵をかける。2人の老婆がベッドを整える。ルイズは自分のベッドのうえに座ったまま。シスターが常夜灯を棚に戻し聖母マリア像のまえでひざまずいて「アヴェ・マリア 恵みに満ち方、など。」と唱える。ラ・ノーマンドとラ・ボシュウが「アヴェ・マリア 恵みに満ち方、など。アーメン。」とつぶやいている声がかすかに聞こえる。) アーメン。(彼女は立ちあがり、そのまま聞き耳をたてる。少し離れたところでふたたび鐘が鳴る。シスターはそれを聞いて躊躇ったあと、意を決しルイズに近づく。やわらかい声で。) ルイズ。

ルイズ: シスター。

シスター: 就寝しないのですか、ねえ?

ルイズ (躊躇ったあとで): します、シスター。

シスター: もう恐くはないのですよね。そうだといいけど。あらゆるものが寝静まっていますよね。あなたもお休みになるんですよ。

ルイズ: はい、シスター。(ふたたび鐘が鳴る。)

シスター: お聞きになって。わたしをよぶ鐘だわ。帰天された方のための典礼をしなくてはならないの。

ルイズ: でも、シスター――

シスター: いいわよね、ここにはいつづけられないんです。わがママをいう子ではないですよ。お優しい心根の持ち主ですよ。いいわよね、帰天された方はわたしたちの祈りを必要としているのです。亡くなった方の方が、生きている方よりも優先されるべきなのです。

ルイズ: でも、先生が……

シスター: あなたがおっしゃらなければ、ドクターはなにもわかりっこありません。あなたがおっしゃれば、わたしは面倒なことになって、その後に巻き起こる醜聞から眼をそむけることができなくなるわね。ドクターはああいう人ですよ。あらゆることをひどく騒ぎ立てる人。彼なら、偉いさんたちに報告するでしょうね。彼なら、報告するように求めるでしょうし、女子修道院長はそういった類のことがまったくもってお嫌い。だから、彼女を怒らせるようなことをしてはいけないわ。結局のところ、ここでは責任の所在は彼女にあるのです。申し上げていることがおわかり?

ルイズ (あきらめて): はい、シスター。

シスター: まあ。聞き分けがいいわ。これからも親友ですよ、わたしたち2人。あなたのためなのよ、本当よ。ここから出ていくための力添えとなって、大いに尽力だってしてあげられます。それで結構。

確かに聞き分けがいいわね。おやすみなさい。(下手ドアにむかうと同時に幕が下りる。遠くで鐘が鳴りつづけている。)

第2幕

場面。前幕と同一。もう深夜になっている。月の光が窓から射して、ルイズのベッドのうえにおちる。棚の上、ガラスのなかで常夜灯の灯りが明滅する。底知れない沈黙。遠くで時計が10時をうつ。ラ・ボシュウとラ・ノーマンドがベッドのなかで静かに動き出す。

ラ・ノーマンド(低い声で): ちょっと!
ラ・ボシュウ: なに?
ラ・ノーマンド: 彼女は寝ているの?
ラ・ボシュウ: そう思う。
ラ・ノーマンド: あやふやではいけないの。
ラ・ボシュウ: 見てくるわ。
ラ・ノーマンド: 待って。誰かが廊下をやってくるように思う。
ラ・ボシュウ: シスターたちが戻ってくるのかな?
ラ・ノーマンド: おそらくそうでしょうよ。(2人はふたたび横になる。さらに沈黙。騒がしい音が次第におさまる。もういちど起き上がる。)あの人たちはここには来ない。
ラ・ボシュウ: そうね、階段を下りて行くのでしょう。
ラ・ノーマンド: いかにも。(小休止)
ラ・ボシュウ: それで、今晚ということでしたよね?
ラ・ノーマンド: あの方はそうおっしゃっています。
ラ・ボシュウ: あの方には従わなければなりませんものね……そうしないとしたら……
ラ・ノーマンド: なにか痛い目にあわされることになるでしょう。
ラ・ボシュウ: あの方がその子にしたような。
ラ・ノーマンド: あの方が望んでいたものを忘れていないわよね?
ラ・ボシュウ: なんてしたかしら?
ラ・ノーマンド: 麻のタオル。
ラ・ボシュウ: もっていません。
ラ・ノーマンド: 歯でシーツを一部分引き裂きなさい。
ラ・ボシュウ: それはいい考え。(シーツを引き裂く音がする。)
ルイズ(眼を覚まして起き上がる): あれはなに?
ラ・ボシュウ: 眼を覚ましつつあるわ。
ラ・ノーマンド: しずかに!(小休止。2人ともじっとだまったまま。)

ルイズ: なにかが聞こえた。たしかだわ。いたわ、このなかに……。 (部屋のなかを見回す。)
ラ・ボシュウ(シーツの切れ端を枕の下に押し入れてしまう): これだ、あった。
ラ・ノーマンド: それでは、合図を待つことにしましょう。
ラ・ボシュウ: 合図!
ルイズ: あの人たち話しをしている! 寝ていないのだわ。(首を伸ばしてもっとよく見る。)
ラ・ボシュウ: 見て。眼を覚ましている。
ラ・ノーマンド: 聞き耳をたてているわ。(それぞれのベッドに腰をおろす。)
ルイズ: どうしてそんなにじっとしたままなの?(声にだして) なに? なにがほしいの?
ラ・ノーマンド: 恐がらないで、いい子ね。
ラ・ボシュウ: 大丈夫よ。
ラ・ノーマンド: まさしくフクロウの鳴き声で眼を覚ましたのかな?
ラ・ボシュウ: あれは死の合図よ。(2人は笑う。)
ルイズ: だまって! ああ、この狂った女たちと同室だなんてひどいわ。
ラ・ノーマンド: あなたの方が狂っているのよ!(笑う)
ラ・ボシュウ: 自分はもう狂ってないって思っているのね!(笑う)
ラ・ノーマンド: すぐに精神病院を抜け出すことになるってね。
ラ・ボシュウ: 外にでることなんて二度とないわ。
ラ・ノーマンド: もし出るとしても、棺桶に入ってしまうことになるでしょうね。(2人とも笑う。)
ルイズ: 怖い。怖いわ。ここに独りぼっちでいたくない。いたくない……
ラ・ノーマンド: 全然ひとりぼっちなんかじゃないわよ。
ラ・ボシュウ: わたしたち2人ともここにいるわ。(2人とも立ち上がる)
ルイズ: ほっといて。ほっといて。ほっといて……(この瞬間、ロング・ホイッスルのような音が上手の部屋から聞こえる。ルイズは立ち止まる。2人の老婆は身じろぎもせずにいる。)
ラ・ノーマンド: しずかに。あの方だわ。
ラ・ボシュウ: 声をださないで。あの方が聞いているわ。
ラ・ノーマンド: あなたの声を耳にしたら、あの方は怒ってしまう。
ラ・ボシュウ: 怒ってしまったら、自分の身を案じなさい。

ラ・ノーマンド： そう、案じなさい。
ラ・ボシュウ（祈禱をしているときのように）： ミゼレーレ
ラ・ノーマンド： ミゼレーレ・ノビス。
ラ・ボシュウ： ここを出ていくと——
ラ・ノーマンド： 棺桶入りになる。
ラ・ボシュウ（上手ドアを指さして）： あの方がいらっしやる！ ほら！
ルイーザ（窓にはりついて立っている）： ドアがひとりでに開きはじめています。助けて！ 助けて！
（ラ・ボニエスが上手ドアから登場。静かにドアを閉める。）
ラ・ボニエス： ボシュウ、ここに灯りをもってきて。
ラ・ボシュウ： おおせのとおりに。
ラ・ボニエス： 暗すぎるわ。
ラ・ボシュウ（常夜灯をもってきて、ルイーザを照らす）： こちらに。
ラ・ノーマンド： あの子をがっちりつかんでいる。
ラ・ボシュウ： そうよ。そうよ。そうよね。
ラ・ノーマンド： どうなさるおつもりなのかな？
ラ・ボシュウ： わかっていますよ。あの方はわかっています。
ラ・ボニエス： ノーマンド、麻はある？
ラ・ノーマンド： こちらに。
ラ・ボニエス（ラ・ノーマンドに）： この子の両手をつかんで。大きな針はある？
ラ・ボシュウ： 針？
ラ・ノーマンド： そう、シスターのかぎ針。
ラ・ボシュウ（とりに行く）： ああ、そうだ、棚に。
ラ・ノーマンド： 聖母マリア像の前に。
ラ・ボシュウ： こちらに。
ラ・ボニエス： よくわからないわ。
ラ・ノーマンド： もっと灯りがいらいますね。
ラ・ボニエス： 常夜灯をもっと近づけて。
ラ・ボシュウ： 大丈夫ですか？
ラ・ボニエス： もっと近く。（ラ・ボシュウが灯りをかなり間近によせる。）
ラ・ノーマンド： もしかしたら殺したのだと思ったのでは。この子、死人のようなもの。
ラ・ボニエス： いいえ。少し首をぎゅっと握ってやっただけ。すぐに回復するわ。
ルイーザ（じたばたしながら）： ああ！
ラ・ボニエス： それごらんないわ。
ルイーザ： わたし、どこにいるの？
ラ・ボニエス： そんなにじたばたしないで。
ルイーザ（彼女たちを見て）： ああ。わたしになにをするつもり？

ラ・ボニエス： そんなにわめかないで。わたしは、なにもしやしません。そこにいるお2人さんがするのはですよ。
ラ・ボシュウ： おや！ まあ！（笑う）
ラ・ノーマンド： おや！ まあ！（笑う）
ラ・ボニエス： お静かに！ お聞きなさいな、いい子ね。あなたへのお勤めをするつもりなの。狂っていませんよ。覚えてますか？
ラ・ノーマンド： もちろん、覚えてますよ。
ラ・ボシュウ： 覚えてますとも。
ラ・ボニエス： 狂っているあいだ、動物があなたに憑りついていたんです——フクロウですよ。まだあなたのなかにいます。そこ！ わめくのならば、また首をぎゅっと握ってやらなければいけなくなるわ。さあ、説明しているあいだは、聴いてちょうだい。フクロウを追い出しにかかるのよ。
ルイーザ： だめ。ああ！ ああ！
ラ・ボニエス： わからないの？
ルイーザ： お願いです……！
ラ・ボニエス： あなたのためなのよ。
ルイーザ： ああ！ 殺すつもりね。
ラ・ボニエス： こんなことで死にはしません。
ルイーザ： 助けて！ 助けて！
ラ・ボニエス： おとなしくしないでいいの？ 急がなければならないの。もうこれ以上わめいてはいけませんよ。
ルイーザ： ああ！
ラ・ボニエス： じっとしていなさい！ すぐに終わるわ。やつらがどこにいるかはわかっているけど、いまはそんなに簡単に見つけれないの。（ルイーザを刺す。）ああ！ ほらそこだ。暖かい。いいわ。ずっと前に手にかけてあの子たちにそっくり。（下手舞台裏で複数の足音がする。）
ラ・ボニエス： しっ！
ラ・ノーマンド： 聞いて！
ラ・ボシュウ： だれかが来る。（ラ・ボニエスが灯りを消す。不意に部屋が沈黙に陥る。月だけがルイーザの遺体を照らし出す。）
ラ・ノーマンド： 気をつけて。（みんながかがんでベッドの背後に隠れる。小休止。複数の足音と声。）
某シスター（舞台裏で）： 本当ですよ、シスター、確かに物音を聞いたのです。（シスター登場。）どうしたの？ 誰か呼びましたか？（敷居に立つ。小休止。）
シスター： 聞き間違えにちがいないわ。
某シスター： どこをどう見ても静寂のようですね。
シスター： それでは、行きましょう。けっこうです。

女子修道院長はチャペルでの典礼を中座するのを
お気に召しませんしね。(女性たちの声でとても甘
美に唱えられているハレルヤが遠くで聞こえる。)
某シスター： そうですね、聞き間違えました。まったく
もってあなたは正しいわ、シスター。チャペルに
もどりましょう。

(彼女たちは退場し、それとともに幕がゆっくりと下
りる)

幕

本研究は、JSPS 科研費課題番号 JP23K00386 の助成を
うけた成果の一部である。なお、翻訳ならびに解説につ
いて、専門家の立場から中村晴香氏と山田幸代氏にご
一読いただき、有益なコメントを多数頂戴することが
できた。記して両氏に感謝申し上げる。

解説

ここに訳出されたのは Christopher Holland, *The Old Women* の全文である。テキストは Richard J. Hand and Michael Wilson, *London's Grand Guignol and the Theatre of Horror* (U of Exeter P, 2007) 収載のものを使用した。

*

『老婆たち』はフランスとイギリスの両方のグラン・ギニョルにおいて鍵になる芝居のひとつである¹⁾ という指摘があるように、この芝居は、グラン・ギニョルという演劇ジャンルにおいて、重要な位置をしめる。

グラン＝ギニョルとは、フランスのモンマルトルのグラン＝ギニョル劇場を舞台に展開された演劇レパートリーの総称をさす。²⁾ オスカル・メテニエによって1897年に創始されたこの劇場は、1899年に経営者がマックス・モレーに交代すると、恐怖演劇の劇場

へとその性格を強めていく(1962年閉場)。その際、座付き劇作家として活躍したのが、アンドレ・ド・ロルドであり、彼には〈恐怖のプリンス〉という称号があたえられていた。ド・ロルドは、演劇150作以上、短編小説40作以上を執筆する多作ぶりであったが、彼以外にも、たとえば、『オペラ座の怪人』の作者ガストン・ルルーが、この劇場に作品を提供していた。

グラン＝ギニョルは、20世紀になると、ロンドンにも活躍の場をみいだす。1908年にパリの劇団がロンドン・ツアーを実施したこともあったようだが、1920年にはリトル劇場(1910年創設)を舞台に、ホセ・レヴィによってグラン・ギニョルがイギリスでも独自に展開された。³⁾ その結果として、1920年から1922年までの2年間の興行期間のあいだに、8シリーズ合計43作の〈ロンドンのグラン・ギニョル演劇〉が上演されることになる。⁴⁾ 時をへて1928年には、グラン・ギニョル再開が試みられるが、これは短命に終わる。

ロンドンの演目を概観してみると、本家フランスのグラン＝ギニョル関係の翻訳・翻案劇が半数近くを占めていることが容易に知れる。その一方で、それらに交じって、イギリスの劇作家によるオリジナル作品もたしかに存在していたし、恐怖演劇だけではなく、喜劇などもそこには含まれていた。⁵⁾

さらに、ロンドンのグラン・ギニョルには、フランスに負けず劣らず、多彩な人物たちの顔が登場する。『闇の奥』をしたためた小説家ジョゼフ・コンラッドは、自身の演劇作品『笑うアン』をロンドンのグラン・ギニョルに持ち込んだが、残念ながら却下されている。⁶⁾ 彼の小説『密偵』が演劇化されて1922年1月にアンバサダーズ劇場にかけられたときには、グラン・ギニョルで活躍した俳優ラッセル・ソーンドイクが重要な役を演じている。⁷⁾ 一方、ラッセルの姉シビル・ソーンドイクは、グラン・ギニョルが活動を終えた翌年の1923年にジョージ・バーナード・ショーの『聖女ジョウン』でジャンヌ・ダルクを演じて名をはせた女優であるが、その一年前まではロンドンのグラン・ギニョルの代名

¹⁾ Hand and Wilson, *London's Grand Guignol*, p. 176.

²⁾ フランスのグラン＝ギニョルについては、英語の文献では、Richard J. Hand と Michael Wilson の3つの著作——*Grand-Guignol, Performing Grand-Guignol, Grand-Guignolesque*——ならびに Mel Gordon を、日本語の文献では、荒俣、ド・ロルド、リビエール& ヴィットコップ、真野を参照した。

³⁾ cf. Hand and Wilson, *London's Grand Guignol*, pp. 11-17. なお、本解説では、フランスのグラン＝ギニョル

と、イギリスのグラン・ギニョルを、「ダブルハイフン」と「中黒」の違いとして記述することにする。

⁴⁾ cf. Hand and Wilson, *London's Grand Guignol*, pp. 273-77.

⁵⁾ cf. Hand and Wilson, *London's Grand Guignol*, pp. 273-77.

⁶⁾ Hand and Wilson, *London's Grand Guignol*, p. 25.

⁷⁾ Hand and Wilson, *London's Grand Guignol*, p. 87.

詞と言ってもよい存在であった。ロンドンのグラン・ギニョルには、劇作家ノエル・カワードも関与していたことはつとに知られている。さらに、1928年のグラン・ギニョル再開の際には、いまや老境に入った劇作家アーサー・ウィング・ピネロが駆り出されているし、『死後』という作品で登場人物のひとりモラレス——実際はギロチンで切られた首——を演じたのは、ジェイムズ・ホーエルであった。⁸⁾ ホーエルは、この後にアメリカにわたり、ボリス・カーロフを怪物に仕立てあげて映画『フランケンシュタイン』（1931年）を監督し、歴史にその名を刻むことになる。ロンドンのグラン・ギニョルには、このような綺羅星のごときイギリス文人たちが集い、文化的星座を形成していたのである。

＊

『老婆たち』は、クリストファー・ホーランドの創作ではない。アンドレ・ド・ロルドの短編恐怖小説「精神病院の犯罪（*Un crime dans une maison de fous*）」をもとにした翻案恐怖演劇にほかならない。⁹⁾ フランスのグラン＝ギニョルにおいても、同じ「精神病院の犯罪」をもとにした恐怖演劇『精神病院の犯罪、あるいは悪魔のような女たち（*Crime dans une Maison de Fous ou les Infernales*）』が、アンドレ・ド・ロルドとアルフレッド・ピネによって翻案されている。しかし、この芝居は1925年6月まで上演されなかったとされるため、クリストファー・ホーランドの『老婆たち』の方が1921年に先行して舞台にかけられたことになる。ただ、原作を同じくする『精神病院の犯罪』と『老婆たち』は、細部の異同はあるものの、プロットが近似しているため、後者は前者の英訳もしくは、ロンドン版と考えてもよい。

クリストファー・ホーランドという人物についても、実のところ、これは劇場経営者ホセ・レヴィもしくは俳優ルイス・キャソン——シビル・ソーンダイクの夫——のペンネームであるにすぎない、とする向きもある。¹⁰⁾ たしかに、クリストファー・ホーランドという名前は、これ以外の大戦間期イギリスをめぐるあらゆる歴史の記録に登場しないことから、この説も、あながち等閑視することはできない。いずれにしろ、『老婆たち』という芝居には、作者同定の問題が残存している。

「クリストファー・ホーランドとはなにものなのか」——この問題だけではなく、彼のテキストそれ自体にも解決すべき問題がある。『老婆たち』というテキスト

は、適切な編者による書誌学的検討をくわえられたうえで本文生成にいたっていないため、基礎的な研究の端緒にもついていないといえるのだ。もっとも、これについては、『老婆たち』に限らず、ロンドンのグラン・ギニョル演劇のほとんどがかかえている問題でもある。作品集が公刊されているフランスのグラン＝ギニョルとは異なり、ロンドンのグラン・ギニョルは、いまだ作者と作品名しか知ることができない状態にあるものが多くあり、初演から100年たったいまでも全容を見通すにはいたっていないのである。

参考文献

- Gordon, Mel. *The Grand Guignol: Theatre of Fear and Horror*. Revised ed. New York: Da Capo P, 1997.
- Hand, Richard J. and Michael Wilson. *Grand-Guignol: The French Theatre of Horror*. Exeter: U of Exeter P, 2002.
- Hand, Richard J. and Michael Wilson. *Grand-Guignolesque: Classic and Contemporary Horror Theatre*. Exeter: U of Exeter P, 2022.
- Hand, Richard J. and Michael Wilson. *London's Grand Guignol and the Theatre of Horror*. Exeter: U of Exeter P, 2007.
- Hand, Richard J. and Michael Wilson. *Performing Grand-Guignol: Playing the Theatre of Horror*. Exeter: U of Exeter P, 2016.
- 荒俣宏（編纂）『怪奇文学大山脈 III——西洋近代名作選 [諸雑誌氾濫篇]』（東京創元社、2014年）。
- アンドレ・ド・ロルド『ロルドの恐怖劇場』（平岡敦編訳）（筑摩書房、2016年）。
- フランソワ・リヴィエール&ガブリエル・ヴィットコップ『グラン＝ギニョル——恐怖の劇場』（梁木靖弘訳）（未来社、1989年）。
- 真野倫平（翻訳）『グラン＝ギニョル傑作選——ベル・エポックの恐怖演劇』（水声社、2010年）。

⁸⁾ Hand and Wilson, *London's Grand Guignol*, pp. 49; 79.

⁹⁾ ド・ロルド, pp. 9-18.

¹⁰⁾ Hand and Wilson, *London's Grand Guignol*, p. 63.